



TITLE:

支那南北辨

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 支那南北辨. 經濟論叢 1937, 44(5): 497-511

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130928>

RIGHT:

神戶博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟論叢

第四十四卷 第五號

(通卷第二百六十三號。禁轉載)

奉
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

目次

滿洲移民の特異性と掃匪問題.....	法學博士 山本美越乃	一
農家の負債と負擔能力.....	法學博士 河田 嗣郎	二〇
現代社會學に於けるパレット社會學の地位.....	文學博士 米田庄太郎	三三
幕末の商稅論.....	經濟學博士 本庄榮治郎	三六
實際政策と政策原則.....	經濟學博士 作田 莊一	六六
『維新の詔』に於ける變革の國是.....	經濟學博士 石川 興二	七九
シュレーデルの王室金庫論.....	經濟學士 小山田 小七	九七
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて.....	經濟學士 中川與之助	一二三
工場内勞働者教育事業の目的.....	經濟學士 大塚 一朗	一二九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて.....	經濟學士 松岡 孝兒	一四六
明治初年の官營産業に就いて.....	經濟學士 堀江 保藏	一六四
財政學の基本問題.....	經濟學士 大谷 政敬	一八三
取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて.....	經濟學士 今西庄次郎	二〇二
貨幣の中立性に關する一考察.....	經濟學士 中 谷 實	二三八
リストの國民生産力說.....	經濟學士 白杉庄一郎	三三四
財政學と經濟政策論との交流.....	經濟學士 島 恭彦	三六〇

目 次

二

生産の構造と貿易	經濟學士	松井 清	三六九
租税の農業に及ぼす影響	經濟學士	山岡 亮一	三八六
再保険と共同保険との接近	經濟學士	佐波 宣平	三三三
耕地管理組合に就いて	經濟學博士	八木芳之助	三二五
熊澤蕃山研究序説	經濟學博士	黒 正 巖	三三六
水産經濟學と其の課題	經濟學博士	蜷川 虎三	三五二
輸入制限と國內物價との關係	經濟學博士	谷口 吉彦	三六三
昭和の税制改革	經濟學博士	汐見 三郎	三八五
自然利子論	文學博士	高田 保馬	四〇七
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて	商 學 士	武藤 長藏	四二四
現段階に於ける租税體系	經濟學博士	土方 成美	四三七
支那南北辨	法學博士	財部 靜治	四七七
赤字公債の消化	經濟學博士	小島昌太郎	五二二

支那南北辨

財部 靜治

一

有_下爲_二神農之言_一者、許行、自_レ楚(辭源によるに國名、周成王封熊繹於楚、居丹陽、在今湖北秭歸縣、春秋、戰國時、奄有今兩湖、兩江、浙江、及河南南部、後爲秦所滅)之_レ滕(辭源によるに春秋國名、在今山東滕縣)とは、「孟子」滕文公章句上中に記する一節なり、航空の藝文天工を凌ぐの今日たればいざ知らず、支那春秋戰國の古代に當り南北相去ること遠き右兩國間を如何にして往復せしか、一の疑問として先づ畛からざる興味を喚起せしむべき所なり、實に民衆聚落し普ねく王化に沾へる地域を以て中國と呼びつつ、帝王版圖として十層宏大なる四疆を包括すべき天下と之を區別するの觀念が、古くより支那に存せしは、孟子の前記章句中にも右名目を區別して使用するにより明かにすべき所たり、而も亦その王化及べる地域が唐虞三代の古代にありても相當に廣濶なりしは推測するに難からず、現今支那地理の一研究者致ふる所によるに、支那に於ける平地とすべきは小面積のもの諸所に存するに過ぎず、就中最大なるは中部支那より滿洲境に達する複合三角州なり、浙江省寧波に始まり西方錢塘江を経て杭州迄繋ぎ、更に北方揚子江平野及淮河下流域を貫き、山東省內南北に亙る黃河の沖積砂土質大地積に及ぶ、是等平地中にても人口最も稠密なる最大部分は、河南、山東、河北、安徽北部及江蘇北部に於ける黃河、淮河及海河(白河下流)の

三角州平地なり、この地理的地域は北支平野（約三二四千方料）として知られ、人口八千萬（民國郵政一九二六年調）の家郷にして、又古代支那文化の中心たり、^{*}實に上下數千載に亙る支那の歴史は、此地區と多少の交渉なきはなかるべしと雖も、中國視されたるものが夏殷周の古代にありても右地域に限らることなかりしは、書經禹貢編に列敘さるる諸地方に照しても、言下に首肯され得べき所たり。

支那は歐洲の全面積に近からんとするの廣土を擁するに拘はらず、自國人口を養ふに足るべき主要食料を産するを得ず、年々巨額の砂糖、米及小麥を輸入しつつあり、而も亦四十世紀以上の永きに亙る農國としての支那（米人 F. H. King の一著として *Farmers of Forty Centuries*, 1926 あるを注意す）に於て農業は重きをなすや依然たり、その總農產物世界に冠たり、稻、小麥、甘藷、高粱、大豆、黍、大麥、落花生、茶及絹の產出上、諸國民全部中第一位を占むるに似たり^{**}而して是等農產物中北地及び南產に適すること何人にも著しき特殊作物を併せ數ふるを以て考ふるに、是等の產物が各地を通じ一樣に耕作せらるるとせざるや自明なり、實に世界列國中南北の腹背對照を窺はしむる點に於て、著しき一國として獨逸を舉ぐべきは割合に周知せらるる事實なり、されどそは政治上歴史上の諸理由に基づくこと多きに反し、同國に比し十數倍の領土を抱擁する支那が、氣候風土の地理的諸事情に深き根蒂を据えつつ、同様なる對峙を一層顯明に呈露するは世界にその比なく、そは農事につきても鮮明なり、現に支那に於て古來治生の主要食物として五穀を舉ぐるも、その諸古典註釋上何をその五種中に數ふるや必ずしも一ならず、特に稻をその一つに加へざるものもあり、（和漢名數及辭源參照）現今尙印度にも勝りて飢饉の國土（興味多き好著 *Walter H. Mallory, China: Land of Famine*, 1926 あるを注意す）たる支那にては、周禮大司徒、以荒政十有二

* Cf. George Barcock Cressey, *China's Geographic Foundations*, 34. p. 48 and Tabl XXXVI.— Statistical Summary, facing p. 394.

** Cf. Cressey, op. cit., p. 101.

聚萬民とあるを始めとし、歴代經濟政策社會政策の固本施設として飢饉救済を重んじたるが、救荒食物特に天產食用植物の研究たる救荒本草の端緒も夙に開かれ、病者以弘藥食之資、學者以取多識之益、農者以擇樹藝之種、雖曰救荒而其用實博哉と松岡恕庵をして謂はしめたるが、(和刻「野譜」序中)遂に明の永樂(一四〇三—二四年)中周王橚就藩開封(河南省)、以國土夷曠、庶草蕃廡、考核其可佐饑饉者四百餘種して「救荒本草」凡八卷を著はし(右著者が多くは料を採訪に得たるに反し皆親試に得て成り、與救荒本草互出入、所載及其三分之二とせらるる明鮑山撰「野菜博錄」四卷別に存す)次いで同正德(一五〇六—二一)の末年には江蘇省高郵の王磐「野菜譜」二卷を著はし、更に崇禎(一六二八—四四年)中姚可成之が補遺を輯め、都合草木百二十種を圖説したるが、その間にも自ら南北の別あり、「致富全書」中王磐氏野菜譜詳於南、周憲王(李時珍本草綱目に周王橚を誤傳せるを踏襲せるものなり)救荒本草詳於北、成書具在、皆食草木法也と謂はしめたるあり、又その交通事情より考ふるに、その國土廣大なる割合に海岸線は短く、之が發達は一に陸内に待つ所多きに拘はらず、古來之が發達を阻碍せる幾多の地理事情に富めり、東西八百支那里(一里は英哩の五八分の二五)に亘る秦嶺山脈により大體に南北を分ち、普通の交通方便視されたるものは所謂南船北馬の短言により、その大梗を徵表せしむべきも、南北共に西部陸内に入ること深くして山岳重疊し、陸上交通を大に困難ならしむ、その間前記特異の農業事情と相待ちて最も注目すべきは、東西交通の大血脈たる揚子江の水運と共に、南の收穫米運搬のため夙に西紀前數百年の昔に起工せられ、揚子江河口地域と北支平野の運河網とを繋げる大運河の要度なり、その運搬力より察するときは素より鐵道軌道及荷積用自動車に比し、之を同一に談ずるを得ずと雖も、之がために全支經濟の調整に貢獻する所如何に大なりしかは、歷史上の一事實を引くのみに

ても之を明かにするに足れり、即ち唐の世にありても多く米穀を産する地は江南地方にして、今の浙江、安徽の諸省を最となせり、故に毎年數百萬石の租米を船に積み、揚子江より運河を汭りて淮水を経過し、遂に黄河に出て又洛水に入りて洛陽に輸し、更に長安（今の西安）に送るを常とせり、後其の運輸の法屢變りしが租米を運送することは依然として廢せず、東方爭亂の際には漢水を汭りて長安に送れりと云ふ。^{*}廣大なる領域複雑なる地理事情並に之に伴ふ諸特殊經濟事情は、自から住民の身心的諸特質にも影響を及ぼすこと深きや察するに餘りあり、現にその心的資質の良面を大觀する者によるに、支那民族は外來國民分子を同化せしむること常に甚だ易々又敏速なり、支那生活の優越、支那生活の吸引力、支那人世界觀の賢明は、支那的要素に強き重味を保維せしむればなり、支那人の心的資質中には高尚とすべきものあり、支那人は實地の才能及明敏なる常識上諸亞細亞民族中にその匹儔を看ず、熟練なる工匠及商人としては惟ふに世界中之に匹敵するものなからん、記憶の能力には大に暢達するも論理及抽象的窮理上著しく歐洲人に劣れり、支那人の氣質は太だ感奮激發的なり否情熱的なりとさへ議すべきも、そは諸感情を抑制し外面的無感覺の顔面表情を保つの習慣として、外人目撃者の眼に映じ易きものにより差引相殺せらる、災厄に對する支那人の剛毅及不屈は絶讃を値ひす、支那人が節儉又勤勉にして、社會的禮法に關する諸事項に付几帳面たり、威嚴を尊重し施されたる恩義への鋭き謝恩心を備ふること等は、公民として彼等を卓越せしめ又法を恪守せしむとせらる、^{**}而も亦その間北と南との相違も輕微なりとせず、此點に付我國高等普通教育を受けたる者概ね推想すべき所を、大正四年時の鐵道院により發行せられたる *An official Guide to eastern Asia*. Vol. IV, China p. IXXI) には明言せり、惟へらく一面孔子教他面老子の哲學により代表せらるる

* 市村瓚次郎瀧川龜太郎纂著訂正増補支那史卷四、明治二十五年出版 pp. 97, 98.

** Cf. Meyers Kleines Lexikon. I. 31 S. 475; Harmsworth's Universal Encyclopedia. p. 1951.

二派の思想は、それぞれ其の相違せる自然的社會的環境にその源泉を汲めるは明かなり、漢民族が始めて昌へたる黄河沿流地域（一言して黄河と呼ぶもその全延長は二七〇〇哩に及ぶ、その主要支流としての渭水は甘肅に發し南東へ流れて陝西に入り、同省を西より東に横ぎり東關附近にて黄河に合す、水の利を得たる同流域は實に支那文明發祥の地たり）^{*}にては之を揚子江流域に比するに自然は惠澤を施すに控え目たりき、而して南支にてはその諸思想も是等を表白する仕方も、その周圍に於ける自然界の豐穰同様想像力の富贍により著出せるも、此の社會は實際的なるを出色とせる文學及哲學を出したり、老子は孔子が彼を訪へる時、周朝の一官吏として北支に住めりと雖も、生地よりせば南人たりき、莊子（蒙人）及屈原（楚人）も亦然り、唯莊子の出生地は北地に存したり、さ計り古き時代に印度の汎神教的超世俗的諸觀念が、夙に南支に流入することあり得べくも非りき。

右の如く支那南北事情を概觀せる後を承け、特に興味を喚起せしむるものは實に米國紐育州（New York）大學地質及地理學部長 George Babcock Cressy による前出引用書なり、著者は一九二三年ゴビ砂漠を経て南支に入り上海大學に地質を講義せる傍ら爾後六年間に支那の諸地方を見學旅行すること三萬哩に及び、その間支那に關する文獻夥しきに拘らず、人口、農業、資源及郷土的潛勢力に關し實際は知らるること乏し、小地域の批判的地理的臨地研究は殆んど缺けたり。苟くも支那の風土を適切に敘説せんとせば、環境諸因子の解析、文化的諸型及その分布の研究、並に歴史的繼起の評論もその中に宿さるべしとし、五年前の上海事變に際し初稿焼失の災厄にも遭ひつつ、稿を新たにして公刊せられたる所たり、著書の初めに先づ敬聽すべき左の高説は吐露されたり、曰く人生は環境により深刻なる影響を受くるも、人は自然を變形改易し之に人の銘心を刻すとするも亦等しく眞

* Cf. A. E. Moule. the Chinese People, 1914 p. 20.
** Cf. Cressy, op. cit. p. 1.

なり、支那の風物は一の生氣物理的渾一なり、一樹と之を生やす土とは緊密に融合せらる、人は地に根ざすこと甚だ深くして、その間唯一切を包容すべき渾一あり、別立現象としての人として又自然として然るに非ず、唯一の有機的六合として然り

と。而して著者の眼目とする所によるに、諸種の地理的地域研究上その地に優秀の作用を及ぼすべき因子は區々たるものあうん、假令ば蒙古に於ける降雨の缺乏、西藏の大高度、江蘇に於ける特色ある收穫物（その北部に主として黍及小麥を産するも、清江浦及淮安を限界として南は稻作主たり、その境は是等地點より東方海に迄及ぶ^{*}）は、是等諸地方に於ける死活的因子なり、大多數の地域に於て土地形態は人の經濟的諸活動及文化的諸得失を引導するの著相なり、蓋しその地形は土壤、氣候、及農業を變化せしむればなりとし、かくて必要に應じ諸地方の地形、氣候又は農業を種々に力説せんことを努めつつ、諸地方に對する人の應化を指導とし支那領土に就き十五地域類別（前出脚註に引ける著者の統計表參照）を想定せるは、同書の至要貢獻として志せる所なり、從ひて同書が是等類別諸地域の分説に當れるは素よりなるが、之に先だち支那の自然地理、氣候、農業、礦物、貿易に就き、數章に分ちて概説せる所あり、就中同概説中初めの部分に背反配合の國土並に北及南として説く所は、地理事情を主眼とし歴史上の變遷並に現在政治事情に觸るることを期せずと雖も、その著相を平敘して要を得たりと考ふるを以て、以下之を本論の骨子として借ることとし、後日の増訂を期しつつ姑らく寄稿の寸志に代ふ。

二

世界中何れの國內にか發見され得べき諸大背反存したりとしても、そは支那領土内に於ても存在すべき所なり

* Cf. Cressey, op. cit. pp. 72, 0101, 167.

氷河に被はれたる山、乾枯したる沙漠、宏潤なる平原及亞熱帶的森林は、支那劇のため多彩の道具立を仕組むに資したり、氣候上又人生上幾多の元素は分れて各々その本分を盡すあり、是等を凡て唯一幅のパノラマに取込むが如きは不可能なり、北支那は半不毛にして黍、高粱及小麥を産するに、濕潤なる南支の民衆は稻により生存す、されど何處にても土地使用の周約及自然への親近を以てその一特色とすべきあり、家屋は一はこねたる粘土により他は割りたる竹により建築せられ、丘陵は露出しの黄土 Loess より成り、或は茂れる綠色を着くるあり、行旅は重くるしき二輪車により或は運河の小艇によるの別あるも、勤勉なる民衆は何處にも存す。

粗朴なる農村社會と萬國同風の都市中心とは隣接す、上海の大百貨店には巴里の最新流行品及世界中に於ける諸マートよりの新貨を陳列し、十六の働輪を有する二二〇噸の大汽罐車は、北平の西方南口關門を超えて列車を牽く、飛行郵便は主要なる諸商業中心地を繋ぎ、その事務を益々擴大しつつあり。支那の哲學者及政治家は多々益々世界の指導者間にその地歩を占めつつあり、進運地域より不變なる舊思想地域に移るに、旅程哩數數十百を數ふるの要なし、第二十世紀より明朝（その滅落は第十七世後半の初期に屬するを注意す）に還るは間々眼前に數歩を運ぶの一些事に過ぎず、兩者何れかその一つの眺望内に、輓近の一大工場と質素なる藁簣農家とを收め得べし。

驚くべき經濟發展は特に近年に至り國內諸部分の面目を改めつつあるか、著者は此點につき北支の一英字新聞が一九三二年に於ける支那税關の報告に本づき抄報せる所を引けり、之によるに各大都市は今や殆んど皆電燈により照され、多くの村にありてさへ然りとす、輓近の重力給水設備は漸次に興されつつあり、殆んど一切の都市

は電話裝置を有し、その多くは自働電話交換器を備ふ、殆んど一切の州には弘く各地に繋ぐべき長距離電話裝置を有すると共に、官營電信及無線電信行政は最も有能に國土の用を充たしつゝあり、道路擴築は當世日常の出來事となり、工場特に纖維工場の増進は著しろしく、發電所は諸工業のため電力利用に資しつゝあり、鐵道線は延長せられ、都市村閭及州の動力車道は急に舊歩道に代り、かくて運輸方便を敏速ならしめ又改良せしめつゝあり河川には架橋せられ、乗合自動車及荷物自動車の便は手押車に代り、されど支那を知りその領土の廣きを知る者は、仕遂げらるべき何の事業が依然として尙殘さるかを誰か實感せざらんとせり。

支那の西洋化はよかれあしかれ海邊又は航行の便ある水路に沿へる數都市、又は鐵道開通せる部分丈けに嚴然限られたり、爾餘廣地域の住民は依然として明朝時代の舊生活によれり、文化發展上かかる背反あることは、支那に關する諸括約説をして危うからしめ、政府の政治的諸行動を複雑ならしむるに資す。

是等地域的相違の多くは地理の基本的諸因子により制約せらる、廣東は熱帶内に存するも今の滿洲帝國內北滿洲は北極圈を去ること十三度に過ぎず、極北西沙漠中吐爾番 Turan の綠地は海面下約千呎なるに、東西藏の水河を戴ける山頂はその四哩以上に上る、福建の沿岸は一ケ年七五吋の降雨を見るも内部蒙古にて十吋以上を受くるは稀なり、極北に於て草木の生茂を許すべき季節は辛うして三ヶ月に及ぶのみなるに、極南にては全年を通じて之を望み得べく、從ひてその惠澤に沾ふこと多き地方には年二回三回の米穀收穫を舉げしめ得べく、かく一回限り收穫の他地方に對立す。

支那に於ける諸問題の基底たるべき主要因子の一つは、その千山萬水の特色たる不利の地勢にあり、領土中餘

りに廣大なる部分は凸凹多き山及用途なき丘陵により刻まる、肥沃なる平野は揚子江の下流々域、黄河の大三角州及現滿洲帝國內中部滿洲に存するも、良農業國土の廣地域とすべきは是等三地方に限らる、西及南支那の全部は鮮明に山岳丘陵に富み、耕作の可能を限定し商業及交通を阻害し、割地主義 Sectionalism を育成す、内部地方旅行難あることは上海その他沿海の諸港をして、支那それ自體の幾多地方と交通するよりも歐米と通交するを容易ならしむ。

是等の事相（特に萬民親和又は離反の反映たるべき言語につき察するに、方言の混亂は特に南支の沿海地方に著し、そは北及中部地方を通し官話として知らるる朝廷語行はるるに背反す）は歐洲及北米の土着地域と支那とを判然識別せしめ、是を不齊一なる諸絶斷地に分碎す、されば支那が南東亞細亞に比較的孤立して國を建つることなりしとするも、共和文化として達成せられしは輕小たるの外なかるべく、又政治的親和舉るは一層微弱たりしならん。

支那人種特に漢民族の單一及同種性は屢々揚言せられたり、一義によらばこは眞なりとするも、言語、體軀の外見及心理上大なる變異を伴ふの事實を指摘するは全く重要なり、山東の支那人と廣東の支那人との間共通の點を有せざること、佛人及伊人間に窺はるるものと相譲らず、その相互間理解を遂ぐる上に同様なる困難を訴ふることあるべし、福建省内のみにても方言一〇八種に下ることなしと傳へらる。

廣東の人は支那の他地方人に比し身長短し、S. M. Shirokogoroff が南支那に於て夥しく測定せる結果によるに、平均身長一、六〇九・二耗を示せり、之を東支那の一、六四二・四耗及北支那の一、六六五・七耗に比するに、廣東人と北部平野の人との間に於ける平均相違約二吋なり、加之巴旦杏形眼の具現鮮明にして、その百分率江蘇に

ては二三・四北支那にては一一乃至一二なるに廣東省にては三六・四なり、又廣東人の頭は小さく顔は短くして前額比較的に高し、又皮膚は北方人間普通に見る所に比し稍々黒し。

三

支那に二つあり、その何れも別個の諸特色を有し他の諸特色と嚴然背反す、幾百年前 Marco Polo は是等の背反により印象せらるること深かりし結果、右二大區劃に別異の名稱を與へ、東部にては黃河西部にては陝西省の南境を限界とし、北を Cathay と呼び南を Manji と稱したり* (明治三十一年共益商社複刻 Colonel Henry Yule, Cathay and the Way Thither, being a Collection of medieval Notices of China. Vol. I 附載の支那地圖には右二名稱を明かに掲ぐ) 兩部は共通性質を有することも多けれど、陸上北平より廣東に旅行する觀光者にして地理的環境に於ける諸大相違を發見せざるはなからん。

一つの支那は南にあり、潤澤なる降雨の國土たり、所在に幾多の丘陵あり、その間に於ける狹小平坦地は何れも周約的に耕作せらる、そは運河及水田の地たり、稻及竹を産し、夥しき人口は狹街の諸都市に密棲す、(普通に下水は平石を鋪ける狹路の地上を流れ、道幅は辛ふして一人力車を通ずるに足る) その住民は短軀にして夥しく異なる方言を以て語る、北人が重厚又保守的なるに反し、南人は急進的革命的なるの傾向あり。

他の支那は北にあり、限りあり又不定なる降雨の國土なり、平坦地積は割合に廣大なるも農業不安定にして飢饉頻繁なり、南の稻及濕田農業の代りに標準作物は黍、高粱及豆なり、南に於ける翠綠の代りに此地方は褐色なり、一年中多くは風塵吹き荒む、運河の小艇及苦力運搬人の代りに、二輪の車及牛馬驢馬騾及駱駝等の牽獸あり

* Cf. The Travels of Marco Polo, ed. by Thomas Wright. 1901 p. 163.

諸都市は南に於けるが如く密集せらるることなし、(三五〇萬人を包容する上海に次いで、天津は第二位の大都市たるも

北

限りあり不定なる降雨(四百乃至六百耗)

大禍とすべき洪水旱魃「支那の悲哀」

寒き冬暑き夏、小雪

四—六月ヶ月の繁茂季、一回又二回作

半不毛の氣候、蒙古による大影響

不安定の農業、降雨に異狀あらば安全保證の餘裕微小

乾地段階作

水澆しせざる石灰質土壤

頻繁なる飢饉、地方によりては殆んど毎年

高粱、黍、小麥、豆

無草木

冬季中の褐色及風塵

街路及二輪の荷車牽獸驢馬及騾馬

粘土壁の家屋、煉瓦造り温床備附

廣街の諸都市

屈伸少き沿海線、港灣少く漁撈不振

陸上對外通交

滿洲への移民

元來齊一なる人種、蒙古混血種を伴ふ

普ねく通用する官話

古典的保守的なる學者

支那南北辨

南

潤澤なる降雨(八百乃至一六百耗)

運河及灌溉、年中利用し得べき水

涼冷なる冬暑くして多濕なる夏、氷雪は珍らし

九ヶ月乃至全年繁茂季、二回又は三回作

亞熱帶的氣候、夏の季節風、雨及颱風

周的農作、凶作稀にして產額大

灌水されたる段階作

水澆しせる非石灰質土壤

比較的繁榮、人口過密の地は例外

主要作物としての稻

竹及茂れる植物

四季翠綠の山野

鋪石せる踏跡道、乗物轎、荷物運び苦力水牛

組合せたる竹材壁及草葺屋根の家屋

溢るる如く密棲せる諸都市、狹街

屈伸多き沿海線、良港に富み漁業昌ゆ

水路による對外通交

「南洋」諸國への移民

人種的變異に富み、原始的非支那民族を伴ふ

多種なる方言

急進又躁忙的なる商人及山師

その人口は一四〇萬とせらるゝ廣き街路あり、住民は長軀にして齊一の方言官話を語る、爰に孔子及諸聖の國土別言すれば古典的支那あり。

南は綠色たるに北は褐色にして砂塵多きを特色とす、一切の事項中最も重大視すべきは、北に於ける繁茂季が四乃至六ヶ月に過ぎざるに、南にては九ヶ月乃至全年に亙ることなり、從ひて北の作物は一回なるを例としその二回なるは一部地方に過ぎざるに、南にては二回又は三回の收穫あり、こは飢饉の虞渺きこと、昔ねく繁榮に沾ふことを意味す、その相違は甚だ鮮明なるを以て支那を二大地理的單位に分つや多くの國にその比を見ず、而して社會的、經濟的、政治的相違は是等の背反に基づきて展開せられ、人種の相違さへも伺はしむ。

諸相違を一層明瞭ならしむるため是等事項を表の形式に示すこととせり、唯注意すべきは是の如き諸括約説が一定地方全部を通ずる絶對特色を示すものとしてよりも、寧ろ著しき背反を示すの意に出づることを記憶する際に限り實價值を有すとすべきことなり、比較の價值はその圖解式對照に存す。

人或は黃河、揚子江、珠江（上流は西江と稱す）の三大河流域により、又北嶺及南嶺を限界として西北部及中部支那に三分す、政治及軍事上古來の幾變遷に照し、支那現政府の首腦者勃興の發祥地よりせばその意義に富めり、（最近に一例を擧ぐれば大阪朝日新聞社特撰世界現勢解説地圖も此例によれり）現滿洲帝國をその疆域外に逸するは兎も角とし、中部及南部諸省の本領的一致を忘るるの嫌あるや誣ゆべからず。

北と南との境は推移的なり、多くの特色は徐々に一地域より他の地域に重疊又は没入せらるゝ、その變轉一般的には揚子江及黃河間の中部北緯三四度圈に起る、その境界東部にては淮河の流域によるも、一層西部に向ひその

背反沿海附近に比し一層鮮明なるべき地方にては秦嶺の諸嶺峯と一致す。

支那地誌に於ける興多き幾多問題の一つは北と南との發展間に存する背反なり、支那古代史の殆んど全部は北部に起れり、古典的諸傳説が隆興せるも爰にあり、極南の諸省は幾多朝代を通じ蠻民と總稱されたる非支那人的種族により生まれしか、是等種族は北部沙漠地方より侵入せる遊牧民の壓迫を受け、支那民族が南方に移住するに従ひ愈々驅逐さるるの外なかりき、揚子江流域を含める南支那は保守的なる北に比し、現今一層繁榮し又進歩的なり、凡て世界の他の部分に於て文化は熱帶に發祥し、後には中間緯度に位する冷涼地方が赤道近くの地方に比し一層進歩するも、支那に於ては之に反せるに似たり、即ち前に一言せる如く文化は北西に起り、東及南に移りたればなり。

數千年の間北と南とは文化及諸理想上顯著なる相違を示し、その結果としての治國難は頻繁に政治的調整の可能を凌ぎたり、支那施政上の諸時事問題を秤量するに當り、地理上の是等基本的背反を閑却すべきに非ず。

二大區劃の著しき背反視せる所は、括約化されたる情勢を示せるものなれば、個々の地積にとりて適切なる解釋を授くることなし、支那の如き洪大又多彩なる一國土を取扱ふ際には、理解され易き大さの同種性單位地域に分つの要あり、省別を以て満足とすべきこと稀なり、蓋しその境界は政治上軍事上に於ける幾多變遷の結果にして、自然の一仕組に契合すとすべきものなければなり。

地理は人並に自然を取扱ふを以て、その地理的意義よりせんか、一農民が河南に住むや山東に住むやの別はその農圃が肥沃の平野に存するや岩多き山内に存するやに比し遙かに輕視すべし、その作物のため適度の降雨あ

るは、その省の首府名何たるかに比し一層重大事たり、かくて支那國土の區劃として意義ありとすべきは、政治系統によるよりは寧ろ環境及經濟上の諸事情に契合せしむべし。

地理的地域を分界するには、一地積内に於て人が多變なる環境に對し、施すべき應化法上本領的一致存するの事情により決すべし、何れの構案も全然満足とはなし兼ねべし、數地積間に共通分母とすべきものは全く存せずと想はるればなり、何處にても諸特色の重疊あり、或は一型地域の域外地區が隣接地方内に存することあり、支那に於ける問題は特に南及南西部に互り地形上農業上の峻烈なる境界存せず、記述事項稀少なる地方に於て錯雜せり。

四

詩之寬緩而和柔、書之委曲而繁重者、舉皆周也、而商人之詩、駿發而嚴厲、其書簡潔而明肅、以爲商人之風俗蓋在乎此矣、夫惟天下有剛強不屈之俗也、故後世有以自振於衰微、(商朝三十世中復興せる者に五世あり)然至敗也、一散不可復止、蓋物之强者易以折而柔順者可久存、柔者可久存、而常困於不勝、强者易以折、而其末也乃可以有所立、此商之所不以不長、而周之所不以不振也とは、蘇轍が商と周とを比較して論ぜるところたり、今同一文豪により東晉以來天下學者分而爲南北、南方簡約得其精華、北方深蕪窮其枝葉、(王衍論中)とせられし以前は兎も角とし、支那に於て大多數を占むる漢民族の極盛時代たりし唐以來のみに就きて攷ふるも、漢民族は政治上軍事上に於て屢々異民族に壓服されしが、文化的には反對に異民族を征服し、その學問藝術は發達し、文章繁縟の禮は加はれり、而してその歷朝創業期と末世との間には、右商周間に於ける相違に似たるもの

常に存したり、研究を歴史の方面に擴げその變遷の跡を尋ぬるは興味多しと雖も、こは本編に於て問はんとする所にあらず。又繪畫の道に就き、南北共に高手の畫に氣韵生動と骨法用筆の二筋備はらざるは無けれども、就中南宗の旨は氣韵生動を失はぬやう骨法用筆を練りて、皆其自然天然の處に歸するを務めとす、北宗の末流に至りては是等の微妙に心懸ず、骨法用筆に於て作りて過ぐるもあり、心愈く疎にし及ばぬもあり、過ぐるものは自然を損ひて氣韵を失ひ、及ばぬものは自然に背きて生動を得ずとは、神道實行教の教祖柴田花守が中年の著「畫學南北辨」(明治十五年出版)中に論ぜる所なるが、之に似たるが如き相違は人生の諸理想、文化の諸相にも窺ひ得べきが如し、特に奔放急進的なる南人の勢力全支を席卷せんとするの慨あり、國民經濟的發展の急步調と相待ちて國民統一主義の聲高く、全支人民議會開催の氣運は熟し、北及南よりする國際通交の錯綜愈々繁からんとするも、他面地方割據的軍閥の舊勢力は侮り難く、國家生活の完甌に關する下層民の蒙昧無關心は依然として舊態を脱せざるが如き現民國に就き、現状及將來を考ふるは邦人として忽諸に附し難き所なるも、之に當るべき認識具足の士は自から世に乏しとせざらん、吾人は本編中單に支那の地理事情を主眼とせる Cressey の所説を紹介し、徐ろに觀せんと欲す、新疆は民國地方行政區劃上一省として認められたりとするも、九又十月の涼秋北風天山の草を吹絶つは依然たり、斬新の航空機は西藏の空高く飛べりとするも山東の行客秦山遙かに隴山の雲を望み、夜々愁夢多しとすべきは唐代と異なるなからんと。